

ダウンタウンへ

ニューヨークに着いたその夜に、長年聴き続けてきたピアニスト、バッド・パウエルの生を耳にするという思いがけない幸運に、いざさか興奮状態のまま「バードランド」を出て夜半を過ぎた路上に立

△(14)▽

ていた。「コルトレーンだて? おれ、彼の出るとこ知ってるぜ」  
雑誌「ニューヨーク」や、新聞「ウィリッツ・ウォイス」、あるいは電話の「ジャスタクラブ案内」で、出演ミュージシャンの動向が分かるのを知ったのは、もう少しあるのこと。その時は、ジャズの街ニューヨークなら、だれでもがジャズ好きなんて思い込んでいたのかしらねえ。でもちよつと考えれば、それは全くほかけたことで、例えば、外国から東京にやってくる、いきなり「どこかで渡辺貞夫聴けなかなあ」なんて聞くようなものかもしれないね。

ったものの、そのままホテルに帰ってベッドに入るといつ気分にはなれなかった。

手をあげて乗り込んだタクシーの黒い肌のドライバーに「ダウンタウンへ」と告げると、当然のように「ダウンタウンのどこへ」と尋ねられて、「ジョン・コルトレーンが聴きたいなあ」とつぶや

きながら、西海岸のロスあたりでは、移動にすこし時間がかかるのは「承知の通り。ハイモサ・ビーチにあるクラブ「ライトハウス」など斥道たぶり一時間の道のりだ。だからタクシーに乗ると、人なつこいドライバーたちは例外なく「二人なら、シートを乗り越えて隣の席に

よ」なんて声をかけてくる。だが、ニューヨークでは、そんなのんびりしたことはありえない。ともかく僕は信じられない

# 幸運、コルトレーン 空の白むまで陶酔

さすが、満員の盛況

一段と高い、だ円形のステーションを真ん中に、向こう側はレストラン、こちらはスナック風でジャズに耳を傾けるのが目的の客の席、そんなつくりの店だから、僕は迷わずス



1966年に名古屋を訪れたジョン・コルトレーン(右)、左はアリス夫人

夢中で何の屈託もない。本当は今からやるのかなあ。ニューヨーク・オーリンズから「ニューヨーク、旅の疲れとジャズとアルコール。ようやく襲ってきた睡眠と闘いながら待つことおよそ一時間、ついにコルトレーンが姿を現すや、客席は一

圧倒した音の洪水

この夜、一曲一時間を超す、すさまじい音の洪水に、ダウンタウン前まで打ちのめされたが、ひときわくつきりした映像として今に残るのは、ステーションに昇る階段に腰をかけ、楽器を抱きかかえ、たまたま(めい)想にふけるかのよつに、仲間の演奏に耳を傾けて身しろぞもしなかつた今は、きコルトレーンの姿だった。

バック側にあいていたステーション真下のカウンタに腰かけ見わたすと、さすがにコルトレーン、満員の盛況だ。でも一時をこつくに過ぎて一向にミュージシャンの気配すらも感じられないのだ。

瞬にして静まりかえり緊張に包まれる。この年の暮れ、生涯の傑作「至上の愛」を吹き込むことになる絶頂期にあったコルトレーン。マッコイ・タイナー、シミ・ギャリソン、そしてエルビン・ジョーンズといった「黄金のカルテツ

か。その光で店先のホスターに目をやると、コルトレーンの「ハーフノート」は、レニで終わり、明日からは、レニ・トリスターン・クインテットに交代とあるではない